

一九九二年度

大学院文学研究科  
中国研究科修士論文目錄  
文学部卒業論文目錄  
文学会賞授賞卒業論文要旨

愛知大學文学會



一九九二年度大学院 文学研究科  
中国研究科 修士論文目録

文学研究科

日本文化専攻

堀尾 香代子 『万葉集』における係り結び「ぞ」「こそ」の研究

森 由卯子 日西対照（日本語教育におけるスペイン語話者のためのローマ字表記）

欧米文化専攻

磯村 佳子 アリオスト作『オルランド狂乱』にみる騎士道ロマンスの世界

# 一九九二年度文学部卒業論文目録

## 哲 学 科

### 東洋哲学専修

- |        |           |                              |        |           |  |
|--------|-----------|------------------------------|--------|-----------|--|
| 八九P四〇一 | 安 藤 亨     | 「氣」の思想                       | 八九P四〇八 | 戸 谷 誠     | 中国伝道                                   |
| 八九P四〇二 | 石 井 正 人   | 孔子の天命観について                   | 八九P四〇九 | 中 根 瑞 代   | 「李白の思想」                                |
| 八九P四〇三 | 伊 藤 多 恵   | アスラの系譜                       | 八九P四一〇 | 中 村 由 紀 子 | 親鸞聖人の念仏について                            |
| 八九P四〇四 | 伊 藤 紀 康   | 古代中国の呪術、占術に見られる陰と陽の思想と日本への影響 | 八九P四一一 | 永 谷 勝 己   | 身体と氣についての思想                            |
| 八九P四〇七 | 井 村 武 由   | 孫子の兵法について                    | 八九P四一二 | 服 田 尚 子   | ユング心理学と十牛図                             |
| 八九P四〇八 | 内 田 佐 也 子 | 朱子学の影響による日本思想                | 八九P四一三 | 細 川 摂 子   | 太平道と五斗米道が民間に与えた影響力                     |
| 八九P四〇九 | 大 野 浩 一   | 古代中国の現実的な思想について              | 八九P四一五 | 吉 岡 美 苗   | 「聖徳太子と飛鳥仏教」飛鳥時代における政治と仏教の交錯を聖徳太子を通してみる |
| 八九P四一二 | 小 島 一 文   | 古代中国神話的世界に対する心理学的考察          | 八九P四一六 | 西 川 元 華   | 章学誠の史学思想について——「博約」「史徳」をめぐって——          |
| 八九P四一三 | 小 林 奈 葉 子 | 「荀子」における人間について               | 八九P四一八 | 坂 野 公 康   | 戦国から秦・漢にかけての山岳信仰と宇宙観——神仙思想を通して——       |
| 八九P四一四 | 近 藤 啓 二   | 「諸葛孔明の思想」                    | 八九P四二二 | 飯 田 豊 子   | 西洋哲学専修                                 |
| 八九P四一六 | 新 川 浩 子   | 大乘初期経典「般若経」の思想               | 八九P四二二 | 飯 田 豊 子   | ベルクソンの『創造的進化』における人間観                   |
| 八九P四一七 | 田 嶋 優 憲   | 「儒教と日本社会」——江戸時               |        |           |  |

八九P四〇三 井口ひろみ サルトルにおける人間存在と自由について

八九P四〇四 板川純子 「サルトルの情緒論について」

八九P四〇五 上野山麻紀 ハイデガーとヤスバースにおける実存について

八九P四〇六 加藤高浩 ショーペンハウエルの認識論

八九P四〇七 川口朋之 「ハイデガーにおける『本来的自己』について」

八九P四〇九 柴田秀樹 カントにおける美の問題について

八九P四二〇 杉浦謙一 ベルクソンにおける「記憶」について

八九P四二一 鈴木明 「J・ボードリヤールにおける記号と現実」

八九P四二四 高橋進 「『テアイトス』の第一定義について——プロタゴラスの尺度説におけるヘラクレイトス主義の影響——

八九P四二六 鳥居禎史 デカルトの「神の存在証明」について

八九P四二七 長尾誠一郎 デカルトにおける学問の理念

八九P四二八 成瀬直美 ヘーゲルにおける「主人と奴隷」の問題

八九P四三〇 野口理絵 スピノザ「エティカ」における人間の幸福

八九P四三一 深谷誠 デカルトにおける道徳について

八九P四三三 堀田真紀 ハイデガーに於ける無について

八九P四三三 松澤恭子 ソクラテスの魂

八九P四三四 丸山義雄 ハイデッガーにおける「歴史性」について

八九P四三五 村瀬能美 メルロー・ポンティの「知覚の現象学」における身体観

八九P四三六 山中勲 デカルトにおける身心問題について

八九P四三七 山守博子 デカルトにおける判断論

八九P四三九 伊藤幸子 ベルクソンの「笑い」について

八九P四四〇 大橋咲予 ハイデッガーにおける現存在分析について

八九P四四二 小西一仁 ハイデガーにおける死の問題について

八九P四四三 柴川義幸 フォイエルバッハにおける人間のとらえ方

八九P四四三 若林伸一郎 ニーチェの人間観

# 社会科学

## 社会学専修

八九S五〇一 池 永 信 也 現代日本社会における「差別」と「いじめ」

八九S五〇二 石 川 昌 治 現代社会と老い

八九S五〇四 大 口 賢 治 ファシズムにおける人間の心理

——ナチズムを中心にして——

八九S五〇五 大 橋 隆 ストレスに関する心理学的研究

八九S五〇七 奥 村 健 二 開発途上国における社会発展

——オルターナティブな開発についての検証——

——

八九S五〇八 奥 村 準 子ども社会とあそび

八九S五〇九 金 子 裕 子 老人研究のパラダイム——意識

と存在へのライフコース論的アプローチ——

——

八九S五〇〇 神 谷 千 里 現代日本の余暇の特徴とそのあり方

——

八九S五〇二 木 股 好 司 「東京」極集中問題と再生への課題に関する「考察」——地方

の発展のために——

——

八九S五〇三 小 池 健 次 親の子に対する虐待問題についての考察

八九S五〇三 小 島 克 宏 地域開発と環境について——三

河港における地域開発——

八九S五〇四 近 藤 剛 一 町内会と地域コミュニティ

八九S五〇五 齋 藤 良 彦 不登校に関する研究

八九S五〇六 坂 口 誠 余暇と生涯学習に関する考察

八九S五〇八 柴 田 剛 スポーツにおけるマスメディア

について——主としてテレビとの関連において——

——

八九S五〇三 竹 内 貞 行 生活と交通——生活様式の変化

を通して——

八九S五〇三 土 本 貴 之 余暇と生活の在り方についての

考察

八九S五〇四 土 井 速 人 現代同性愛考

八九S五〇六 長 谷 川 美 和 脳死論争を通しての日本人の死

生観

八九S五〇七 花 木 ア ヤ 仮面と自我・自己

八九S五〇八 平 松 茂 農業・農家の変化と現代の農村

八九S五〇九 別 所 浩 樹 生涯学習社会体系化の課題と方

法

八九S五〇〇 前 川 雄 一 リゾート開発に関する考察

八九S五〇三 間 部 利 一 青年期における孤独感について

——青年の心理学的特徴からみた

孤独感——

八九S五〇三 宮田 知幸 子ども組織と地域社会

八九S五〇三 村田 学 原発問題に関する一考察——三重県芦浜原発立地予定を事例に

——

八九S五〇五 山崎 由佳 エスニシティと民族問題

八九S五〇七 横井 由紀夫 差別の機能について

八九S五〇八 若菜 哲也 都市の消費生活に関する一考察——静岡市、浜松市、豊橋市の事例——

——

八九S五〇四 上田 賢伊知 大衆文化におけるマスメディアの機能——主としてテレビの役割と影響——

——

八九S五〇三 長尾 勇司 現代日本の報道の自由と知る権利——ニュースとは何か——

——

八九S五〇五 松尾 聡子 学校教育の社会的性格についての一考察

八九S五〇七 渡辺 直美 自己の存立と社会的現実

八九S五〇一 相羽 美佐 応用社会学専修

八九S五〇二 相羽 美佐 カレン・ホルナイの人格理論に関する一考察——心の健康を指して——

八九S五〇三 赤木 晴稔 生涯学習によるまちづくりについて——文部省指定地域吉良町

——

八九S五〇三 朝日 一光 有識者の余暇に関する考察

八九S五〇四 磯崎 淳子 学校教育における社会化機能——特に評価・選別・配分機能を

——

八九S五〇五 磯部 和敏 学校教育への国家の統制と子どもの人権

八九S五〇六 植田 あゆみ 情緒障害児の事例研究

八九S五〇八 加藤 健 自殺に関する若干の考察

八九S五〇九 榎原 多岐子 流行現象に関する一考察

八九S五一一 小島 英嗣 若者とテレビメディア

八九S五一二 此島 誠司 無意識についての諸問題について

八九S五二三 小林 由紀子 現代社会の家族問題——少年犯罪・非行問題に限定して——

八九S五二四 篠田 有見 日本人の特質と国際化への適応に関する一考察

八九S五二五 神野 裕二 「生涯学習社会」における社会教育の課題

八九S五二六 杉本 幸司 青年の余暇観についての考察

八九S五二七 岳 博宣 マックス・ウェーバーの社会変

八九S五二八 竹野 順治 老人介護に関する諸問題

——

——

——

——

——

——

——

——

——

八九S五二九 城 幸介 青年期とスポーツ——私のパーソナリティ形成の関わりをめぐって——

八九S五二〇 中村圭一 環境問題と文化——日本人の自然観を通して——

八九S五三三 根本麻子 自動車社会と環境問題に関する考察

八九S五三二 萩原 広 情報化社会論

八九S五三五 広瀬清州 「大衆」とマス・メディア——えん罪事件報道を通して——

八九S五二六 堀田直美 「日本人の心性と病理」——精神分析学的視点からの考察——

八九S五二七 松浦典子 障害者の労働保障

八九S五二八 馬淵裕子 先端医療と生・死

八九S五二九 水野宏美 方法としての「子ども」と現代社会への視角

八九S五三〇 森田康裕 日本における女子パートタイム労働について

八九S五三一 山本悦子 現代社会における労働時間のあり方

八九S五三三 吉川知江 『異質』との共存——日本の「国際化」の論議を通して——

八九S五〇五 岩崎 寧 経済摩擦から文化摩擦へ——異

文化間コミュニケーションの視点から——

八九S五三六 福田文二 環境問題の社会的ダイレンマ論からのアプローチ

## 史 学 科

### 日本史専修

八九H六〇〇一 石黒隆幸 遣唐使について

八九H六〇〇二 伊東光恵 近世の廻船業について——碧海郡大濱湊石川家の場合——

八九H六〇〇三 岩本康久 律令制下における勳位制について

八九H六〇〇五 大岩涼子 江南市内の寺子屋とその師匠について

八九H六〇〇六 大口八千代 吉田家の神職統制について——文化年間を中心に——

八九H六〇〇七 大滝竜弘 奈良時代の国司監察制度について

八九H六〇〇八 大瀧信行 中世の堅田と本福寺門徒

八九H六〇〇九 大塚利香 平安時代の忌日について——小野宮一門の場合——

八九H六〇一〇 岡 恵美 山川菊栄について

八九H六〇一一 勝谷亮治 大和国河上荘について



八九六〇三 加藤 真弓 尾州宮田村栗本家について

八九六〇四 加藤 陽子 分一徳政令について

八九六〇五 加藤 義人 奈良時代の仏教政策について

八九六〇六 神坂 誠 「上西門院について」

八九六〇七 木村 幸司 明治初期の神道政策についての  
一考察——「大井家日記」より

八九六〇八 黒野 昭広 奉公衆について

八九六〇九 國立 智美 古代の尾張連について

八九六一〇 酒井 由美子 古代の齋宮制度について

八九六一一 澤田 勝人 雑賀衆について

八九六一二 下村 幸子 関東申次について

八九六一三 鈴木 香保美 佐野蓮宇について

八九六一四 瀧崎 純一郎 豊橋ハリストス正教会史

八九六一五 竹下 賢 日本古代の行幸

八九六一六 為実 憲一 安芸国三入荘について

八九六一七 寺西 熱記 祇園の神人について

八九六一八 富永 絹世 長屋王について一考察——長屋  
王の変に關して——

八九六一九 永田 真人 鎌倉時代の流鏑馬について

八九六二〇 野辺 佳隆 鎌倉時代の訴訟制度について  
(八波羅探題について)

八九六二一 飯谷 里香 古代の後宮について——命婦制

八九六二二 平野 伊織 勢州菰野村茶屋の上新田につい  
て

八九六二三 松浦 徹 鎌倉初期の公武關係について

八九六二四 松田 初恵 古代の葬制

八九六二五 水谷 千代美 伊勢国久我家領石榑庄について

八九六二六 矢野 万紀子 近世無壇寺院の活動について  
——三河国淨慈院の場合——

八九六二七 吉田 昌司 伊賀国玉滝荘について

八九六二八 伊藤 正博 名古屋——豊橋間私設鉄道につい  
て

八九六二九 加藤 浩一 下野国小山氏について

八九六三〇 足立 弥旗子 タイ政府と日貨ポイコット運動

八九六三一 伊東 裕次 明の世宗朝に於ける私貿易と海  
寇対策

八九六三二 井上 光 唐朝の藩鎮対策と節度使

八九六三三 植村 知世 中国共產党と民営学校

八九六三四 大須賀 恭子 洋務運動期の民衆運動——江浙  
の反厘金闘争を中心に——

八九六三五 梶浦 健一 明末宦官魏忠賢の専權に關する  
一考察

八九六三六 川上 陽子 近衛兵活動と血統主義

八九日六〇八 柴垣信次 秦代における焚書坑儒について

の一考察

八九日六〇九 杉村利光 清代の水運労働者についての一

考察——主に運軍について——

八九日六二〇 杉山貴俊 唐代後半期の宦官の問題

八九日六二一 関澤義文 漢代郡県制——郡国制から郡県

制への変遷——

八九日六二四 佃守 南宋四大武将の罷免における屯

駐大兵への処遇についての一考

察

八九日六二八 波多野桂子 英領マラヤに於ける日本人ゴム

園の発達

八九日六三〇 早川知己 唐代前半における守捉について

八九日六三三 春海弥生子 強制栽培制度と民間プランテー

ション

八九日六三三 平野明德 タイの経済発展とパッポン

孫恩の宗教意識について

八九日六三三 平山三紀子 清朝の民族政策——同治年間・

陝西・甘肅の回民起義の発生を通

して——

八九日六三六 福田千穂 鄭和の西洋下りに関する一考察

——その貿易的役割について——

八九日六三六 水谷美和子 フィリピンにおけるＢＣ級戦争

裁判について

八九日六三九 宮鍋泰志 隋代における科挙制の創設につ

いて——隋王朝が求めた官僚像

と新旧貴族——

八九日六二八 藤川弘浩 霧社事件の民衆像

地理学専修

八九日六〇一 伊岐見博子 ニュータウンにおける地域社会

形成

八九日六〇三 岩田浩樹 「大都市における犯罪パターン

の分布とその背景——名古屋市

を例に——」

八九日六〇三 遠藤尚 伊那谷を中心とした交通圏の変

容

八九日六〇四 桑亮市 泉州における農業地域の変容

——玉葱栽培を例にして——

八九日六〇五 河野晋治 ゲンジボタル生息地における河

川環境

八九日六〇九 竹内正佳 町並み保存と地域開発——名古

屋市有松を例として——

八九日六三〇 武田宏一 降水の水質について

八九日六三一 寺尾昭博 奥三河山間部における立地工場

の分類と立地形態

八九日六三三 中川香代 「クテ」地名における地理学的

考察

久江三三四 永島 彰 長崎市における丘陵斜面の宅地

開発

久江三三七 前川 英美 都市における空間認識——豊橋

市とさわアーケード内の歩行者を対象に——

久江三三三 若城 香織 豊川市における平地林の縮小過

程とその要因

文学科

国文学専修

久七〇〇一 青野 富美世 雲州往来の研究

久七〇〇二 青山 可奈枝 源氏物語の「かすか」と「ほのか」

宮沢賢治「銀河鉄道の夜」論

久七〇〇三 渥美 菜々 「たけくらべ」(樋口一葉)論

久七〇〇四 天野 伸将 遠藤周作「沈黙」

久七〇〇五 天野 恭子 小野小町説話研究

久七〇〇六 伊熊 和恵 官長の国語観

久七〇〇七 石井 裕之 川端康成「古都」について

久七〇〇八 伊藤 嘉余子 太宰治「斜陽」論

久七〇〇九 白井 優子 『堤中納言物語』の研究——「虫

めづる姫君」——

久七〇三三 大羽 朋美 「門」について

久七〇三五 岡田 久美 『雨月物語』の研究——「青頭巾」

を中心に——

久七〇三六 笠 真弓 森鷗外「高瀬舟」

久七〇三八 久保田 ゆか 宮沢賢治「風の又三郎」につい

て

久七〇三〇 小藤 恵美 立原道造「優しき歌」論

久七〇三三 桜井 崇 奥の細道

久七〇三四 佐原 薫子 『源氏物語』における否定表現

の研究——係助詞「も」が否定

表現に与える影響——

久七〇三五 柴田 操 竹取物語について

久七〇三六 志水 亨 「三四郎」論

久七〇三七 鈴木 美江子 芥川龍之介「羅生門」について

久七〇三八 鈴木 祐美 「とはずがたり」の研究

久七〇三九 園田 慎一 近松と心中物

久七〇四〇 高橋 進 『万葉集』の表現——「柳」の

担うイメージ——

久七〇四一 多久 美紀 「雨月物語」の研究

久七〇四二 塚本 広子 枕草子の研究——定子の描写と

悲哀の一面——

久七〇四三 都築 淳子 与謝野晶子「みだれ髪」

久七〇四四 土井 直子 『南総里見八犬伝』の研究——

『八犬伝』における隠微——

九一七三三 中嶋 康 祐 三島由紀夫『金閣寺』論——光

と闇について——

九一七三六 永田 泉 三島由紀夫『禁色』研究——「感

受性」と「氣質」の救済——

九一七三九 西村 奈香子 堀辰雄『聖家族』論

九一七四〇 野々山 清子 川端康成『山の音』についての

研究

九一七四二 廣瀬 明 美 御伽草子『梵天国』の研究

九一七四三 松尾 太志 樋口一葉『たけくらべ』——作

者がこの作品に投影したもの——

九一七四四 松本 志 栄 源氏物語における「けはひ」に

ついて

九一七四五 三浦 弘 子 樋口一葉『にこりえ』について

九一七四七 宮宅 義 夫 樋口一葉『たけくらべ』論

九一七四八 宮田 俊 宏 『門』について

九一七五一 山田 実 穂 志賀直哉『暗夜行路』

九一七五二 山本 英 範 源氏物語「桐壺」の巻における

「長恨歌」の影響

九一七五三 岡 由美子 島崎藤村『破戒』論

九一七五四 吉崎 弘 親 泉鏡花『高野聖』

九一七五五 吉田 智 夏目漱石『こころ』論

九一七五六 若松 美 鈴 井原西鶴の文学における仏教の

影響について

九一七五七 古田 亜記子 近松門左衛門 世話浄瑠璃の研

究

九一七五八 松村 美 奈 『日本永代蔵』研究

九一七五九 渡會 智 子 志賀直也『暗夜行路』論

英文学専修

九一七六一 青木 紀 子 Charles Dickens の作品研究

九一七六二 石田 靖 子 A Study on *The Ancient*

*Mariner*

九一七六三 一 木 俊 夫 Weaknesses of Japanese Stu-

dents in Passive Formation

九一七六四 伊藤 耕 作 16世紀とナイケンスの世界

九一七六五 伊藤 章 子 A STUDY OF TO AUTUMN

BY JOHN KEATS

九一七六六 井戸 清 香 Charles Dickens 論

九一七六七 井上 和 美 CHARLES DICKENS 論

九一七六八 井上 法 子 ORIGINS OF PLACE NAMES

九一七六九 大塚 栄 二 CHARLES DICKENS 論

(Dickens and Christmas)

九一七七〇 加治木 節 子 CHARLES DICKENS 論

九一七七一 梶野 幸 治 *Oliver Twist* と19世紀当時英国

の社会

九一七七二 加藤 亜 紀 Charles Dickens 論

八九七二五	加藤 しのぶ	ENGLISH TEACHING IN JAPAN	八九七二三	永田 浩子	ウィリアム・フォークナーの「響きと怒り」について
八九七二七	小西 俊博	「ディッケンズの魅力を探る」——ディッケンズの才能と視点——	八九七二三	長通 聡子	Origins of Proverbs and Culture
八九七二八	佐藤 瑞穂	Charles Dickens 論	八九七三七	兵藤 智子	British English and American English
八九七二九	清水 利恵	Charles Dickens 論	八九七三九	堀岡 真也	Charles Dickens 論——Great Expectations——
八九七三〇	杉原 亜子	A Study of William Wordsworth	八九七四〇	三浦 容子	『響きと怒り』について
八九七三二	鈴木 香代子	Charles Dickens 論	八九七四一	美濃島 覚	Charles Dickens 論
八九七三三	高橋 邦彦	TENSE: Form and Meaning	八九七四二	樫山 葉子	「Charles Dickens 論」
八九七三四	鷹羽 教康	ディッケンズの心理的内面性と作品「ディッケンズの精神とクリスマス・キャロルの世界」	八九七四三	安江 美紀	フォークナーについて——響きと怒り——
八九七三五	高谷 誠	C. Dickens の世界	八九七四四	八幡 千暁	In Search of the Invisible Light in <i>The Sound and the Fury</i>
八九七三六	高柳 朗子	フォークナー著「響きと怒り」について	八九七四五	山口 聖子	A Study on <i>THE ANCIENT MARINER</i>
八九七三七	竹内 博美	エドガー・アラン・ポー論	八九七四六	山田 弘之	A Study of Present Tense in English (a graduate thesis)
八九七三六	田島 純子	J. D. Salinger <i>The Catcher in the Rye</i> 論	八九七四七	吉川 亜希	Charles Dickens 論
八九七三九	玉置 弥生	フォークナー著「響きと怒り」について	八九七四八	吉原 真由美	W. フォークナーについて「響きと怒り」
八九七四〇	辻 麻結子	Jane Austen <i>PRIDE AND PREJUDICE</i> における——理想の結婚——			

ハ九七五三 川 下 元 一

CHARLES DICKENS 著  
OLIVER TWIST

ハ九七五二 伊 東 文 子

「Charles Dickens」論

ハ九七五五 古 川 幸 子

ウィリアム・フォークナー著  
「響きと怒り」について

ドイツ文学専修

ハ九七五二 石 黒 佳代子

メンデルスゾーン親子と文学サ  
ロン

ハ九七五二 和 泉 克 己

ヨハンナ・シュペーリ「ハイジ」  
について

ハ九七五三 岡 島 加代子

カフカについて

ハ九七五四 小野田 典 世

カフカ「変身」について

ハ九七五六 北 脇 貴 裕

ハイネの詩の研究——「ドイツ・  
冬物語」におけるハイネの思想

ハ九七五七 小 山 直 子

エーリヒ・ケストナーの作品に  
おける「子ども」について

ハ九七五八 篠 田 和 広

「ニーベルンゲンの歌」におけ  
る悲劇的葛藤について

ハ九七五九 鈴 木 敦 子

シュティフター「石炭石」につ  
いて

ハ九七六〇 鈴 木 綾 子

グリム童話における男と女につ  
いて

ハ九七五三 野 口 敦 史

グリム童話について

ハ九七五三 萩 原 嘉 代

ドイツ文学における魔女

ハ九七五四 林 百 合

ゴットフリート・ケラーについ  
て

ハ九七五五 二 村 岳 夫

フランツ・カフカ作「変身」に  
ついて

ハ九七五六 星 川 隆 宣

「カフカの中のザムザ」  
ツヴァイク作「カサノヴァ」

ハ九七五七 保 田 綾 子

グリム童話

ハ九七五八 松 井 三 枝

シュトルムについて——後期作  
品を中心に——

ハ九七五九 松 井 美 奈 子

ユルゲン・ローデマンの『最後  
の惑星』について

ハ九七六〇 山 口 由 里 子

ルー・アンドレアス・ザロメ  
人と作品について

フランス文学専修

ハ九七六一 青 木 康 臣

スタンダールの「赤と黒」につ  
いて

ハ九七六二 秋 田 尚 美

ギ・ド・モーパッサンにみる恋  
愛観

ハ九七六三 渥 美 知 づ る

ジュール・ルナールの『博物誌』  
について

ハ九七六四 河 村 奈 美

ギ・ド・モーパッサン「脂肪の

塊」について

八九七五〇八 木村 温子  
アベ・プレヴォー作「マノン・レスコー」

八九七五〇九 桑山 成和  
アントワヌ・ド・サン・テグジュペリの諸作品にみる文学上の哲学的精神の特異性

八九七五二〇 柴田 晃  
「ハドリアヌス帝の回想」論  
八九七五二一 柴田 和則  
ヴィリエ・ド・リラダン「残酷物語」について

八九七五二三 杉浦 のぞみ  
ジャン＝コクトーとエレガンス  
八九七五三三 鈴木 一彦  
ボリス・ヴィアン・「日々の泡」について

八九七五三四 田岡 久生  
『プラ論』  
八九七五三五 竹内 知子  
アナートル・フランス作『神々は渴く』

八九七五三六 恒川 誠  
パスカル「パンセ」による彼の人間論に関する考察

八九七五三七 豊島 秀和  
ジョルジュ・ダリアン「泥棒」  
八九七五三八 中瀬 晴恵  
L'amour de MARGUERITE DURAS

八九七五三九 旗山 裕貴  
「ロランの歌」について  
八九七五四〇 日浅 夏子  
フランソワーズ・サガンの『悲しみよ こんにちは』について

八九七五三三 光角 剛宏  
倒錯性——シリーズ「なしくずしの死」——

八九七五三三 安田 美幸  
バルザック著『谷間の百合』について

八九七五三三 渡邊 真紀  
Simone de Beauvoir その人生と文学

#### 中国文学専修

八九七五四〇 渥美 幸一  
劉基——明の開国功臣の文化業績考察——

八九七五四一 伊藤 史歩  
兵馬俑坑の発掘保存をめぐる経過

八九七五四三 今尾 吉宏  
中国人力車の伝播と盛衰  
八九七五四四 岩佐 行恵  
唐詩における季節観——脚韻を中心として——

八九七五四五 上山 史子  
『纏足史——纏足解放運動を中心として——』

八九七五四六 枝木 智子  
中国科学幻想小説の現状と今後の展望——鄭文光作品を通して——

八九七五四八 鬼澤 明日香  
「子夜」における描写技巧の特徴について

八九七五四〇 加藤 正人  
武則天について  
八九七五四二 神谷 亜紀子  
建寧天目茶碗について——宋代

文人と建黛——

八九七西三 小針秀樹 禅讓考

八九七西四 杉浦美友紀 『詩経・国風』——恋歌にみる

古代中国女性像についての一考察

八九七西五 杉本陽子 文字表現の限界に対する挑戦

——阿城の場合——

八九七西六 鈴木亨治 中国社会主义体制について論ず

八九七西七 清家亜矢子 中国の神話について

八九七西八 高木誠一 曹操 孟徳——その実像に迫る

八九七西九 高橋恵子 張辛欣にみられる女性像

八九七西〇 田村恵美子 封神演義——流れる道教精神

八九七西二 寺田朋子 『中国の一人っ子政策——私

観——

八九七西三 中村純子 民国期中国語辞典における日本

語彙——『辞源』『辞海』の初

版を通して——

八九七西三 新川一美 劉向『列女伝』の女性像をめぐ

って

八九七西四 濱島法子 老舎の『茶館』——その演出本

をめぐって——

八九七西五 氷室栄子 英米地名の中国語表記法につい

て

八九七西六 森川陽子 中国語の基本語彙表をめぐって

八九七西六 森口明 『古今奇観』における庶民の願

望

八九七西五 山口かおり 中国人の仏教受容 老子化胡教

をめぐって

八九七西六 岡田昌子 蕭紅論

八九七西〇 加藤隆行 孔子と老子

八九七西〇 西村直樹 「墓誌銘における韓愈の人生

観——



## 「中国伝道」

八九P四〇一八 戸谷 誠

中国における本格的なキリスト教伝道は、カトリックが十六世紀中頃にマテオ・リッチによって、プロテスタントは十九世紀初めにロバート・モリソンによって始められた。

両者ともにキリスト教伝道をしたという点では一致しているが、その伝道方法は多くの違いがある。この内容を比較考察し、さらに「典札問題」と言われる中国社会の風習である祖先崇拜などの儀式を如何に宣教師たちが理解したのか、また現代に至ってどのように解決されていったのかを考察するのが本論文である。

それでは、両者の伝道方法を簡単にまとめることにする。

カトリック（イエズス会）の場合

(一) 上からの伝道。中国官僚や儒学者などの上層知識階級から伝道を始めた。

(二) 天文学・数学などの西洋科学や西洋文化の紹介によって伝道を始めた。

(三) 中国朝廷の中心である北京で始めた。

(四) 適応主義的態度を取り、典札問題に対しても理解を示

した。

(五) 礼物主義。時計などの西洋の贈り物をして、伝道に対して便宜を図ってもらった。

(六) 静かに、かつ徐々に布教した。

(七) カトリック村をつくり、信者になるとその村で生活させて、その子供たちが自然に信者になるようにした。

(八) 初等教育および孤児院経営に力を注いだ。

プロテスタントの場合

(一) 下からの伝道。主に民衆に対して伝道をした。

(二) 聖書の翻訳やトラクト配布、英華辞典の編纂といった文書伝道に力を入れ、印刷事業を拡大していった。

(三) 教育機関を充実させる。英国系は中等教育を、米国系は高等教育を重視した。

(四) 医療伝道に力を入れた。西洋医学によって伝道のきっかけをつくった。

(五) 公開主義。路傍伝道を頻繁に行ない、大声を出したり、鳴り物を使うなどして伝道を始めた。

以上のようにまとめてみたが、必ずしもすべてがこの分類に当てはまる訳ではなく、例外もあることは了承してもらいたい。

カトリック宣教師もプロテスタント宣教師も熱心に伝道したのだが、典礼問題の解決と中国におけるキリスト教土着化には及ばなかった。この二つの問題が解決されたのは、二十世紀になってからで、中国人が自ら牧会を始め、キリスト教思想に基づいて中国文化との接点を積極的に見出し出そうとしたことによる。

中国におけるキリスト教土着化運動は、教団・教派を超えて一つになろうとした「合同型」と、独自の信仰形態に基づいて大きくなっていった「個別型」の二種類に分けられるのである。前者は現代において「公認教会」と、後者は「家の教会」と呼ばれている。

このキリスト教土着化の動きに伴って、先に述べた「典礼問題」がキリスト教思想の根本である聖書に基づき、中国の典礼問題の偶像的な部分を自発的に取り除き、これらの儀式にかえてキリスト教式に新たな儀式を行なうという事で解決された。

正に伝道というものは、聖書に基づいて自国民が展開していかなければならず、そうでなくては決して発展は望めないのである。

また宣教師は、あくまでも自分の信じる教えを広めにきた

者であつて、文化や習慣を破壊するために来たのではないという事を深く認識しなければ、いつの時代でも様々な誤謬が生じるのである。

現在の中国における宣教状況は、決して安泰ではないが、近い将来に起こる東洋の、全世界のリバイバルのための助けになるようにと私は願っている。

## ハイデガーとヤスパースにおける実存について

八九P四一〇五 上野山麻紀

本論文は、私とは何か、を考えるためのものである。この「私」という言葉の内には、〈私という人間〉と〈私に固有の私自身〉という二つの内容が含まれている。私自身を語るためには、人間を考えねばならず、その逆も同じで、この二つはどちらも片方だけでは成り立たないものである。このような「私」を考えるために、本論ではハイデガーとヤスパースの思想を取り上げ、考察していった。

第一章ではまず、我々は日常、私自身であるといえるだろうか、という問いを立てる。ハイデガーにおける現存在（人間）の日常的存在様式の考察をみた際に、我々は、我々がいかに巧妙に「私」を周囲にまぎらせてしまい私自身を喪失しているか、に気付く。ひとは普段たいていは、公共性というなかに身を置き、私自身として独自に生きてはいないのである。つまり、いかなることに對しても本来的に探究する道を放棄している。このことはそのまま、ひとが本来的におのれ自身として生きてはいない、ということの意味する。それでは我々はどうのような場合に本来的であろうと欲するのか。ハ

イデガーは、死を正面から見据えることが、おのれの本来性へつながる、と主張している。一方ヤスパースは、本来性への契機になるものとして、限界状況（争い・苦悩・負い目・死）をあげている。ヤスパースが、実存へと向かいつつ生きている我々に対して衝撃を与えるものを重視しているのに対し、ハイデガーは、おのれに最も固有のものという死そのものの性質に焦点をあてて考察しているのである。それによってハイデガーは、おのれに最も固有の本来的自己（私自身）へと向かう糸口を探しあてようとする。この両者の相違を記憶に残しつつ、次に我々は、現存在が本来性へと赴く過程をみていく。

第二章では、ヤスパースの〈交わり〉という思想を中心に考えていく。ヤスパースは、交わりに入ることなしには私は自己となりえない、と主張する。自己（私自身）になるには、他者との実存的交わりが不可欠なのである。ハイデガーも、この交わりの思想は大体において否定しないであろう。しかし、ヤスパースには交わりにおいても〈超越者〉という思想

があることに、我々は注目しなければならない。これはハイデガーには見られない概念である。超越者は、実存の背後にあつて一切を包括するものであり、また時として我々の実存に瞬間的にあらわれてくるものである。しかし、超越者の領域には我々がいかに実存しつつ生きようとも、我々が入ることはできない。なぜなら超越者は、諸々の存在様態においてあるものではないからである。このような超越者をどう考えるかは、私自身をどのようなものとしてみるか、に通じてくることである。

また、超越者の問題は、真理や存在をどう考えるかに応ずる問題である。第三章では、ヤスバース、ハイデガー両者の真理についての記述を追っていき、真理を前提する必要があるのか、真理前提はどういう意味においてなされるのか、ということを考えていく。そこで我々は、とくにハイデガーの真理の考察を通して、真理を、何も我々の外にあるものとして、前提する必要があることに気付く。実存に対しての真理とは、実存の存在に先行するもの（超越者）ではない。現存在の内にある本来性を見出し、それをはぐくんでいくことこそ、我々の実存にとつての真実だと、私は考える。そうであればこそ、私が私自身となることが、無限の可能性として我々に課せられるのである。

# カレン・ホルナイの人格理論に関する一考察

——心の健康を目指して——

八九S五一〇一 相羽美佐

## 一、論文の構成

カレン・ホルナイは、フロムやサリヴァンらと共に修正フロイト主義と呼ばれる。それは、フロイトの精神分析理論が生物学的傾向をもつのに反発した彼等が、アメリカにおいて社会心理学的にその理論を発達させたことによるものである。本論文は、カレン・ホルナイの人格理論を構成する基本的概念を解釈し、さらに彼女の提唱する自己分析の技法を私自身の実験に対して適応することを試みたものである。

以下にまず、論文の構成を述べる。

## 第一章 心理学における人格理論の概念と本研究の目的及び

方法——(一)心理学における人格の理論 (二)人格理論について (三)人格理論が社会心理学的と呼ばれる所以 (四)本研究の目的と方法

## 第二章 社会心理学派としてのホルナイ——(一)カレン・ホル

ナイの生い立ち (二)ホルナイのフロイト批判 (三)ホルナイの理論体系

## 第三章 ホルナイ理論における神経症の人格の形成要因と諸

特徴——(一)神経症の基本的構造 (二)神経症の傾向の一〇の分類 (三)内的葛藤について (四)「人々の方へ動く」指向性 (五)「人々に対して動く」指向性 (六)「人々から離れる」指向性 (七)理想化された自己像

## 第四章 自己分析——心の健康を目指して——(一)自己分析

の可能性と有望性 (二)自己分析の方法 (三)随時的自己分析の手引き (四)随時的自己分析の実例 (五)自己分析より得られたもの

## 二、ホルナイの基本的概念

ホルナイの心理学理論は第三章にて扱っている。神経症の人格の礎を為すのは、彼が子どもの頃に経験した母親との不安定な関係より生じた「基本的不安」である。彼は不安を補償する為の欲求の獲得に対して、いかなる手段や努力をも惜しまないのだが、それが強迫的なものである故に、すべて失敗に終わる。

ホルナイは、人格化された神経症的欲求の諸特徴を一〇に分類し、それらの非合理的な、つまり内的葛藤を生ぜしめる解決法を示している。私は、そのうちの四つを本章の第四節から第七節において考察している。

### 三、自己分析

自己分析には専門家の手による系統的自己分析と、日常的で比較的容易な随時的分析とがあり、ホルナイはそれらの限界を認めながらも、その必要性和有望性を主張している。

私は第四章において、自由連想法を用いて自己洞察をはかる、後者の用法を用いて自己分析を試みた。それは、昨年の九月頃より三ヶ月に渡って、自分自身が経験した精神的不均衡状態を題材にしたものである。

この経験より得られたものは大きい。自らの抱える問題の中心を把握し、あるがままの自己を受容することにより、それ以前までに自らが感じた安定感と現在のそれとは全く違つて感じられ、カタルシスを得たことを確信した。

### 四、終わりに

本論文においてカレン・ホルナイの理論を考察し、自己に分析を与えることによって、以下のような結果を見出すことができた。

自己を分析するということは、自己という対象を深化させたところで洞察することである。そうすることによって得られた自己理解は、他者を理解することにも重要な手懸りとな

る。自己を理解したうえで他者との関係をもつこと、それは最良の人間関係をつくりあげる方策となり得る、ということである。

最後に、本研究をするにあたって、多大なる御指導を賜つた丸井澄子教授への感謝の辞をここに彰したい。

## 流行現象に関する一考察

八九S五一一〇 桑 原 多枝子

「今、何が流行しているのか?」という問いに一つの答えを出すのは難しい。なぜなら、流行語、流行色、ミーム、といったように流行は我々の社会生活の様々な領域で生じている現象であり、また人によってそのとらえ方は異なるので、一概にこれが流行だ、とは言いきれないからである。特に現代社会において、流行は多種多様であり、マス・コミにも大きな影響を受けている。

こういった現代の流行現象を通して、現代社会を分析するために、これまでの流行理論を整理し、戦後からの消費生活成熟社会の特質を浮き彫りにしていくことを試みた。

そもそも流行とは、社会の許容する範囲内で、社会生活を営む個々人の新しい社会的行為が他者との間において影響しあいながら、新しい行動様式、思考様式として社会や集団のメンバーに普及していく過程であり、その結果、一定の規模となった一時的な集合現象である、と定義し、またその特質として、新奇性、一時性、社会的・文化的背景を反映する、などといったことを挙げ、様々な基準に基づいて、分類をし

てみた。また、流行が成立するための条件として、社会心理学的要因と社会的条件という二つの視点でとらえてみた。

流行採用の社会心理に關していえば流行は、基本的に「同調」と「個別化」という二つの矛盾した欲求の統一によって支えられているが、人々は社会的・文化的条件のもとで形成した動機にもとづいて、新しい様式なり生活手段としての流行を選択的に採用する、といえるのである。

次に、流行とマス・コミュニケーションとの關係について考えてみた。マス・コミは、流行の成立や普及を促進させるばかりでなく、衰退させる作用もある、といえる。また、E・カッツらは『パーソナル・インフルエンス』の中で、流行採用の際は、パーソナル・コミュニケーションが重要な役割を果たし、大きな影響を与えているとした。ところで、彼らはこの中で「コミュニケーションの二段の流れ」仮説を検証しているが、メディアが発達し、オピニオン・リーダーの必要性のなくなってきた現代においては、必ずしも当てはまるものではないといえる。

また、パーソナル・コミュニケーションの中の「口コミ」についての分析も試みた。

ともあれ、マス・コミュニケーションとパーソナル・コミュニケーションはお互い相乗的に作用し、流行の普及に大きな影響を与えているのである。

以上のような、流行現象についての考察をふまえて、戦後の日本社会と流行現象について考えてみた。

戦後、誰もが同じモノを求めていた時代を、「十人一色」時代、昭和40年代以降、個性化、多様化が叫ばれてきた大衆消費社会を「十人十色」時代、昭和50年代終わり頃から、平成にかけて、モノが飽和状態になり、人々の生活スタイルも変化してきた時代を「一人十色」時代とし、流行現象の中で、ファッションと流行歌をとり上げ、前述の三つの時代に当てはめてみた。また、現代成熟社会のキーワードとして「記号消費社会」「高感度社会」の二つを挙げ、それに関連して、ヴェブレンの示した「衝動的消費」についての考察や、「メディアの自己増殖」などについても触れてみた。

人々の意識は、平準化から個別化へ、物質的充足から精神的充実へと変化してきた。現代社会は成熟社会への道をますます進み続けるだろう。それとともに、流行もますます多様化し、細分化され、小流行が多発する、と考えられる。そしてコミュニケーションの働きも、一層、重要になってくると考えられるのである。



# 豊橋ハリストス正教会史

八九日六〇二九 瀧崎 純一郎

豊橋ハリストス正教会（以下、豊橋正教会と略す）は、明治八年（一八七五）九月に伝道が始まってから、現在に至るまで、百二十年弱の歴史を誇る、豊橋地方最古のキリスト教（ロシア正教）教会である。豊橋正教会には、伝道開始当初からの教会活動の記録である『教会日誌』『所務日誌』ともいう）をはじめとして、貴重な史料が多数所蔵されている。本稿を書く前に、まず、それらの史料を整理して『豊橋ハリストス正教会文書』としてまとめた。そして、本稿では、それを元にして、豊橋正教会の歴史を様々な視点から探る事を目標とした。

第一章では、教会を形成するに当たり、信徒の集会する場所の重要性を探る為に、明治八年の伝道開始から同十二年の会堂落成までの会堂建築史と、明治三十五年の聖堂用地買収から大正四年の聖堂成聖式までの聖堂建築史について、『教会日誌』の記録を元に、信者達の活動を中心にして述べた。それによって豊橋正教会の会堂と聖堂が、他からの援助を受けず、信徒達の尽力によって建築された事が解った。（聖堂は、

白亜の美しい建築物で、今日では、豊橋市の名所の一つに数えられている。）

第二章では、教会を運営する為に行われた行事を、宗教行事史、会議史、社会活動史の三分野に分けて検討した。宗教行事史では、クリスマスその他のロシア正教の祭日における教会参拝者数の統計と日曜学校の活動について述べた。会議史では、年間行事としての信徒総会と月間行事としての、男徒会、女徒会について、その成立過程と活動について述べた。そして、社会活動史では、関東大震災等の災害義捐と、日露戦争当時の豊橋俘虜收容所の露人捕虜と信徒の交流等の戦争協力について述べた。以上の事から、豊橋正教会の行事は、日本正教会の活動に沿って行われていた事が解った。

第三章では、教会の経済について、財政史、供給史、献金史の三分野に分けて検討した。財政史では、まず、豊橋正教会の毎年の収支の構造について述べ、そして、豊橋ハリストス正教会維持財団の成立の経緯を、信徒達の動きを中心に述べた。供給史では、大正八年頃に豊橋正教会が日本正教会か

ら経済的に独立するまでの過程について述べた。献金史では、まず、豊橋正教会の献金の種類を調べ、そして、その中の主力献金である通常献金について、各信徒の毎年の通常献金額を『教会日誌』から抜粋してまとめ上げ、その仕組について述べた。以上の事から、豊橋正教会が、信徒による献金以外の収入源を作る等の努力によって、良好な経済状態を保っていた事が解った。

第四章では、教会で活躍した人物について、司祭・伝教者史、役職史、信徒の三分野に分けて検討した。司祭・伝教者史では、司祭、伝教者、それぞれについて『教会日誌』の記述を元にして、その活動を分析して、豊橋正教会における、司祭、伝教者の役割について述べた。役職史では、豊橋正教会を管理、運営した、執事、議友という役員職の構成とその成立の経緯、それぞれの役割について述べ、又、その他の役職（書籍係等）についても述べた。信徒では、『銘度利加』（信徒原簿）等の信徒名簿を使用して、豊橋正教会の信徒の身分構成、地域分布等について調べ、又、『愛知縣統計書』を使用して、豊橋市の各キリスト教会の信徒数を調べ、その変化から、豊橋市における、正教会の勢力について述べた。以上の事から、豊橋正教会には、熱心な司祭、伝教者が居た事、又、豊橋正教会が豊橋市の商人達によって支えられていた事が解った。

## 宣長の国語観

八九七〇〇七 石井裕之

「皇国の事の学をば、和学或は国学などいふならひなれども、そはいたくわるきいひざま也。」

これは本居宣長の『うひ山ぶみ』の中の一文であるが、これを読んで私は違和感を感じた。なぜなら、本居宣長といえは国学を代表する人物として覚えていたからである。その「国学者」である宣長自身が「国学」という言葉を「いたくわるき」という強い調子で戒めているというのは、一体どういう事であるのか。

しかし、宣長の学問に関するこのような違和感は、何もこれだけではない。宣長の書いた物をよく見ると、このような事が多く見られるのに気付く。これは何によるものであるかを知りたいと思い、私は宣長の言葉の研究に関する発言を中心にこの事を考えた。これを調べるのに主に用いたのは、宣長が雅言の正しい用法について解説した書である『玉あられ』である。

また、この書を私が用いた主な理由は次の二つである。それは、これを見ることで宣長の言語観が理解できるのではな

いかと考えたことと、『玉あられ論』という『玉あられ』の内容を批評する書と『玉あられ』を比較する事で、宣長の言語観が特殊なものであったのかどうか分かるのではないかと考えたことである。

そして、この二つを中心に調べた結果、宣長と他の人々との間の大きな違いだと私が感じたのは、宣長が言葉のきまりや働きを非常に重視したのに比べ、一般的には言葉は「おほよそ」つまり適当に使われていたことである。

小林秀雄は「本居宣長」の中で、宣長の言葉の扱い方を次のように述べている。

言語の問題を扱うのに、宣長は、私達に使われる言語という「物」に、外から触れる道を行かず、言語を使いこなす私達の心の働きを、内から掴もうとする。

宣長の学問の他の人と異なる最大の特徴は、この「心の働きを、内から掴もうとする」ことである。これを宣長の言葉で言う、「おのがはらの内の物」にする事だと言えよう。古言を知るには、単に言葉だけ知っていればよいのではなく、

その言葉を使っていた人々の心の働きまで知ることによつてはじめて言葉も理解できるのだと宣長は考えていたのである。

一方、宣長以外の人々の古言の学び方といえは、注釈や語釈といった言葉を客観的な「物」として扱う事によつてそれを理解しようとした。言葉を単なる「物」として見るか、人間の心の働きの一つとして見るかという違いが、ここに見えてくること<sup>が</sup>できる。

最後に、宣長の学問を考える上で、小林秀雄が言う次の言葉は非常に重要な事だと思われるので、少し長い<sup>が</sup>、これを紹介して終わる事にしたい。

上ツ世の、「世の有様」「人の心ばへ」を、現在の自分の心の裡に創り出そうとする努力を重ねているうちに、未だ学問という言葉もなかった、それどころではない、文字さえ知らなかった遠い昔に暮していた人々も、基本的な意味での学問の誕生には、真鍮に立ち会つていた、その姿が、「土字の目」にまざまざと映じて来るようになった。宣長は、其処から物を言つた、常に、其処からしか物を言わなかつた。其処からの、宣長の自在な発想は、「当然之理<sup>シカルベキコトノリ</sup>」で、吾が身を縛上げて、学問の体裁を整えている、そんな学問の抵抗など眼中になく行われた。だが、黙殺された相手としては、これは衝撃<sup>が</sup>だったのである。其処に、宣長の仕事<sup>が</sup>が誤解された一番大きな、それでいて一番見えにくい原因

があつた。そして、誤解は尾を引いて今日に至っていると私は思っている。（『本居宣長』）

## 太宰治『斜陽』論

八九七〇一一 白井優子

まずはじめに、『斜陽』の主人公であるかず子の性質を、他の登場人物と順次対比させていくことによって明らかにしたい。

『斜陽』に登場する母親は、およそ現実に対する抵抗力というものを持たない。何が起ころうとも、身の上にふりかかる出来事は、驚くほど従順に受け入れてしまう。

かず子も母と同じく運命に抗することを知らないのではないのかと思われる描写が見られ、その点から言って、かず子も母も非常に貴族的な精神の持ち主だということができるだろう。

しかし、結果として、かず子は母と対照的な生き方を選ぶ。かず子が革命を起こし、新しい倫理を得るためには、自らもまた貴族的な面を持つからこそ、貴族の象徴ともいえる母親を乗り越えていく必要があったのだらう。

つぎに弟の直治についてみていく。

かず子も直治も、社会でわがものの顔をしてまかり通っている倫理・道徳観をまったく信用していなかった、という点で

は同じである。

ところが、そんな共通部分を有しながら、彼らには大きな違いがみられる。

端的にいって、それは、直治に生きる支えがなかったことのように思われる。直治は生きること自体に疑問を感じ、その意味を問わずにはいられない。彼は生きる、ただそれだけのことに苦痛を感じる人間である。

一方、姉のかず子はものごとにこだわらない。一種生活というものを割り切って考えている女性だといえる。

彼らは、それぞれ苦しみを味わっているが、明らかに苦しみの出発点が異なっている。

かず子は革命を起こすことを決意し、弟は死を選びとるわけだが、この姉弟に共通する部分があるからこそ、姉の革命と弟の死の対比が明確になり、それぞれに深みを与えているのだらう。

最後に上原についてみるが、デカダン生活に耽る彼は、直治に非常によく似た部分を持つ男である。

直治と上原は互いに否定しあっているが、結局のところ、それは彼らが互いを誤解していたからにすぎないと思われる。なぜなら、直治は貴族である自分にひけめを感じ、上原は民衆の一人にすぎない自分にひけめを感じていたため、互いの本当の姿を見抜くことができなかったからだ。

ところが、実際には、かず子だけは気付いていたように、上原も直治も「道徳の過渡期の犠牲者」であるという一点において、共通項を見い出すことができる。

このように見ていくと、母や直治・上原といった登場人物達とかず子には必ずなんらかの共通点があり、そのためにいつそう彼女の革命や生き方が鮮明に浮きあがってくるのだらう。

最後に、かず子の言う革命の本質について少し触れておきたい。

まず第一にはつきりさせておかねばならないのは、彼女がめざした革命が、決して一般に考えられているそれと同じものではない、ということである。

社会一般に考えられている常識や倫理観をまったく信用していなかった彼女の革命は、当然社会一般の概念でとらえられているものではない。

彼女の革命は思想も哲学も主義も必要としない。あるのは私生児を生み育てるという行為である。

そして、自分では行動せず、苦しむこともない世間で言わ

れるところの偉人たちには、自ら行動を起こした彼女の革命を非難する資格などないのだろう。

彼女の革命は、結果として何が起こるか、より先にまず行動をはじめること意義があつたのだということが出来る。

# A Study on The Ancient Mariner の音響について

八九七二〇二 石田靖子

コールリッジの作品「老水夫行」はロマンティズムの神髄と評され、その芸術性が注目されている。彼は詩における統一効果、全体的調和を旨指していた詩人であった。ゆえに論文では作品の中の音響に焦点をあて、その調和がどのように完成されていったかを調べた。

第一章ではこの詩全体を大きく四つのまとまりに分け、実際に声に出して読んだ時に味わうことのできる韻律と、言葉の音的イメージを出来るだけ細かく述べている。また、それらに音程グラフを付記した。韻律が多用されているため、まずこの詩は我々の耳に直接メロディアスに聞こえる。そして作者は風の音や物音など擬音を駆使したり、自然の音のイメージを上手に扱っている。これらの音は各場面に深みを与えており、音響が作品の舞台を創り上げていると言える。

第二章では、前章で取り上げた個々の音の要素を相互に比較し、そこから得られた結果である局部的音の対照について述べる。この詩全体を通して、音が音量的、時間的、質的に対照を成しながら次々と移り変わっていく。そのように置かれ

ることによって各音は互いに相乗効果を出している。この対照な音は時に対立的に聞こえるが、また時に調和的に我々の耳に響くことになる。彼は音を意識的に巧みに配列し、細かく対立・調和させることによって、より高次の調和へと発展させている。では彼の目指していた調和の最終的に出来上がったものは、いかなるものか。

第三章では総合的音響を考えていく。第一章ではこの詩を四つに分け音程をつけたが、その大きなまとまりごとに音響に特徴がある。老水夫らが最初に迷い込んだ南極海では氷山や雷のすさまじい轟音・激音が彼らを襲う。赤道直下の沈黙の海では、その恐怖が彼らの生命を奪う。海へびに純粋に愛する心に向けた老水夫には、死んだ仲間の水夫らの口から立ち昇り空に広がる美しい妙音が与えられる。老水夫の回想から再び現実に戻ると、遠くから神聖な教会の鐘が微かに聞こえる。この四つの音響は詩の中で強力な均衡を成している。(四極均衡論) さらにこの状態の中で音の重なり、縦の関係も探っていく。過去のある音が引き起こした感情が現在の音

に対する感情に重なり、より高次の感情状態に移っていくと作者は述べている。このことから詩の中で影響し合っている音を探り、自分の心の中に実際にどのような感情が沸き起こってくるか調べた。その結果、確かにある音を聞いた時、過去の音を思い起こさせ、その音単品では味わえない感情に包まれる。この高次の感情は次なる場面に影響している。この音の重なりを音声多重構造とするならば、確かにこれは細かい対照音と共に四極均衡によって支えられた全体的な調和を強固なものにしている。これこそ完璧な音響建築であると言え、作品を読み終わった後の得も言われぬ感動をもたらししている一因であると言える。

「老水夫行」は六二五行にも及ぶ詩で、初めはこの長編詩を自分なりにどう味わっているのか悩んだ。音響に焦点をあてたことは一つの私なりの切り口であったが、それによって私自身、コールリッジが確かに彼の詩作の重要な目的である「全体としての統一効果」を成し遂げていることを実感できたことをうれしく思っている。



# ウィリアム・フォークナー著『響きと怒り』について

八九七二五五 古川 幸子

ウィリアム・フォークナー著『響きと怒り』（一九二九）は、南部の旧家コンプソン家の没落がそれぞれ異なる四人の視点から語られている作品である。絶望的ともいえるこの物語において作品の文化的背景を構成する視点、つまりキリスト教の終末論の視点から、「失われた世代」の文学、実存主義文学、不条理文学としての特徴を明確にし、この作品の意味を明らかにすることが本論の目的である。第一章「主題」では、キリスト教の黙示文学の中に示されている終末論の観念がコンプソン家の没落、南部の崩壊、ひいては人間そのものの危機的状况にまで関連づけられることを考察した。つまりこの終末論のもつ絶望的な観念と、あらゆるものに対して不信任感を抱き続けた「失われた世代」のもつ特異な感情とが重なりあつてこの作品を生み出したのである。そしてこのような不安、絶望、虚無などが生じた時代風潮の中における人間存在の状況が作品の主題として追求されている。

第二章「人物」では、コンプソン家の没落というまさに人間の危機的状况に直面した様々な人物を分析することによつ

て、それぞれにみられる人間存在を考察した。例えば、周りの状況に対して何も理解できず、抵抗もできないまま現実を受け入れ、常に現在だけを生きる白痴のベンジーは、まさにサルトルの言う「存在が本質より先行する」ものであり、実存主義的特徴の証例となつている。また時間は破壊力だとの認識を持つ精神錯乱のクエンティンは、終末論的要素を帯びつつ一種の不条理感をも表していると言える。さらには「おら始めと終わりを見ただ」と言うデイルシーのように、終末論を象徴しながらも愛や思いやりを大切にしている人間本来の姿を潜在意識として確認することができる。

第三章「構成」では、フォークナーの現実認識をとり上げ、彼の時間に対する自由な考え方を指摘した。それは彼の構成にも表れていることから、古来、文学論の基準とされているアリストテレスの『詩学』をもとに、フォークナーの作品における構成について検討した。アリストテレスの言うように優れた文学作品が時間的経過としての筋をもつものであれば、この作品には表面的に筋は見当たらない。そのように従来の

化的背景、人間の状況を凝縮して提示した普遍的作品となっている。

文学的形式の法則を破っているにもかかわらず、彼の作品が見事な成功を収めているのは事実である。むしろ時間は全く無視されており、不条理演劇の特色としてウォードルの言う「時間に対する自由な態度」が存分に表れている。それゆえ『響きと怒り』は明らかに不条理文学としての特徴をもつと言うことができる。

そして第四章「人間存在」において、実際にサルトルの主張する実存主義の特徴と比較しながら、この作品における実存主義性を指摘し、人間存在の現在を考察した。まずフォークナーとサルトルに共通していることは、『響きと怒り』を通してサルトルの言う「実存は本質に先立つ」という考え方と、実在するのは現在だけという時間観である。それに反して、フォークナーとサルトルの相違はフォークナーが完全なる無神論者ではないこと、また人間である自分自身を主体と考えないで、サルトルとは異なり、客体を認めていることである。フォークナーとサルトルの実存主義はこのように異なるが、全体を通じてこの作品が十分に実存主義性を帯びていることは明らかであるし、人間存在の原点をここにみることもできる。

以上のようにこの論文では、終末論的視点から「失われた世代」の文学の特徴、実存主義文学の特徴、不条理文学の特徴を明確にし、さらに人間の状況を明らかにすることを試みた。この作品は単に南部の物語だけにとどまらず、当時の文